

死者との 対話は 可能だろうか？

物理的には不可能であっても、例えば恐山のイタコのようにそこに対話の空間をつくることができないものだろうか。「心霊教室」のこだまを遠くに聞きながら、ドローイングと文章でその「対話」を試みたのがこの展示である。

展示は「私が生まれたとき、…」で始まる文章と、各人から提供していただいた写真をもとにしたドローイングからなっている。

文を書いた人たちは「ムサビる！」の学生であったり、私の友人であったりするものの、特別に選んだ人たちではない。また、その作成に関しては自分に関係した事実ばかりでなく、周囲の人のことや家族の話でもよいことにした。

個人に基づくものは可能とするが特定はしない、これが今回の方針で、それはフィクションや文と写真が別の家族との組み合わせになる可能性をも意味する。始まりは個人の思い出や記憶であっても、それは特定の人のそれに留まらず、歴史や他者への思いに通じるようにしたいと考えた。

そうして写真からドローイングをおこしていった。

一枚の写真にはかつての一瞬の時間があり、それが閉じ込められている。一方、ドローイングはたとえ一枚の写真を見て描くにしても、時間を必要とし、しかもそれは同じ感情の時間ではない。私は揺れ動く感情の時間を擦り込むようにそのドローイングをつくり、文章に寄り添わせた。

写真の持っているひとつの時間を、今生きているこの時間につきあわせようと考えた。写真を反復することで、かつての一瞬のリアルさではなく、それと今の時間の距離のリアルさに近づこうとしたのである。

長沢秀之



猪野晋

1947年生まれ

私が生まれたとき、わたしはいも虫のようだった。

呼吸をしながら声を上げ、声をあげながら呼吸をした。それがわたしのすべてであって、身動きもままならないいも虫のようだった。まだ、からだというものがなく、ただ呼吸する生きものだった。

そのうち手が生えてきた。手は一本で、食べ物をつかむためにそれを使うようになり、わたしは自分に手があることにふと気がついた。

それから長い長い夢を見て、夢のなかでわたしは初めて別の生きものを捕まえた。生暖かくて、懐かしいような、それでいてなにか自分とは違う別の生きものに会った気がした。

わたしはその生きものを捕まえて離さなかった。

それを捕まえながらまた長い夢の眠りに入ってしまった。

そうして目が覚めたとき、私は右手で左手を握っていた。私の捕まえた生きものとは自分の手だった。

こうして私は自分に手がふたつあることを初めて知った。

私はもういも虫ではなかった。自分の手を発見したからだ。

そしてまた眠りのなかで土をつかむ足の夢を見てそれから足を発見した。

私は眠りのなかで他の生きものをつかみ、地をつかみ目を覚ました。

そうして何年も生きてきた。



私が生まれたとき、それは40億年も昔のことですが、

あたりにはまだ生命いのちというものがありませんでした。

生命いのちのないものは無数に存在しましたが、それらは崩壊に向かって進むだけでした。

私はまわりからからエネルギーをつくることができました。

そしてなんと…自分の複製をつくれるようになったのです。

でもほんとうにそうだとしたら、私の前に私と同じような生命いのちがあったのでしょうか？

生命いのちの意味のひとつが自己複製だとすると当然私の前にすでに私と同じような

存在があったということになります。でもその始まりの始まりはどうなのでしょう。

無数のものの存在、その無数の実験の中からまるで奇跡のように私のような

生命体いのちが生まれたと考えるしかありません。そしてまたさまざまな環境のなかで

多様な実験が繰り返され、なんとか生命いのちが生き延びられるようになったのでしょう。

生命いのちにそなわっている雌雄、かたち、色などはそれが生き延びるための

多様な実験の結果にほかなりません。私はここで生きられるかどうか、

多様な実験をしながら次の生命いのちにその情報を引き継いでもらい、死んでいきます。

奥山あたる

不明

私が生まれたとき、母の兄は既に戦死していた。

とびきり美男で凛々しい軍服姿の記念写真を見つけ、母に聞いたところ、“それは戦死した兄さんよ”と教えてくれたのはさらにずっと後の事である。

“兄さん”は母よりも若く、当たり前的事だがいつ見ても変わらなかった。母によると“南方”で戦死したということだが、その詳しい情報はついぞ明かされなかった。

その代わり、私の中でその20代半ばにも満たない“兄さん”の像は肥大していった。頭がよくて何でもできて、美男で何よりも若々しい。だから死ぬはずはなく、どこかに今も生きている。その証拠がその写真そのもので、写真はかつての切り取った一瞬ではなく、今生きている証拠そのものになっていた。

その一方で、腰に鈍く光る拳銃の存在がまぎれもない死を暗示していた。この銃はいつ使われたのか？どのように使われたのか？と。

母にとってはどうだったのだろうか？
50代になった母とその写真のことを話したとき、やはり母はその写真を見て“兄さん”と言った。60代の時も“兄さん”と言った。70代のときもやはり“兄さん”だった。生きている母は老いていくのに写真の“兄さん”は変わらずに若い。

その母も86歳で他界した。
今、その20代の“兄さん”と80代の妹である母の写真を見比べて、時間というものがこの上なく個人的であることを思い知らされる。

長沢秀之

1947年生まれ



私が生まれたとき、戦争のさなか、春爛漫、

退院の朝、桜の花びらが頬に一つ、そっと舞い降りた。満開の花の下を、看護婦さん達に見送られながら、病院を後にした。

1941年12月8日、択捉島からハワイ真珠湾に向けて出撃していた大日本帝国海軍連合海軍にこの日戦闘行動開始命令が伝えられた。日本、英米に宣戦布告、太平洋戦争開戦。

中国大陸、東南アジアに戦線拡大するも、1944年にいたって、反撃が激化。南方の島々が米軍の攻撃にあって玉砕していく。5月には洛陽占領、6月、中国から北九州へ初空襲、米軍サイパン上陸、マリアナ沖開戦、制空権を奪われる。7月18日、東條英機内閣総辞職、22日、小磯国昭内閣成立。8月、テニアン、グアム島日本軍玉砕。11月24日、米軍新型爆撃機B-29、マリアナ諸島より東京を初空襲。

東京都国分寺の家を後に、母、姉、と長野県伊那郡に疎開。天竜川上流の閑静な田園風景の中で過ごす。

家の上はB-29の通り道で、富士山めがけて日本に飛来し、中央線沿いに東に向かい、東京を空襲した。家のすぐ東に、南部鉄砲工場があり、空襲されるのは時間の問題であった。

戦後、南部鉄砲工場は廃墟になっており、格好の遊び場であった。隣町の武蔵小金井市貫井北町の子供達が大勢攻めてきて、こちらは少数で、わんぱく戦争を戦っていた。剣道場に通ったが、実戦のためだった。

長尾重武

1944年生まれ

匿名希望

1995年生まれ

私が生まれたとき、世界に色が生まれた。

目覚ましい技術の発達により、写真が鮮やかに彩られはじめたのだ。

人が目を通して感じる視点、色彩、臨場感は決して他者と共有する事は叶わない。言語を通して互いに理解をしあっても、その中には必ずどこかしらに思考のずれが生じる。しかしそのようなずれに気付く事もなく、互いの感覚が一致していると思い込んでしまう。一方、写真とは世界の形・色彩・視点を一つに絞る事でその中の世界を感覚のずれが生じる事なく受け取る事が出来る。

それまで一人一人の中にそれぞれが見ている世界があったが、写真を通して世界を共通・共感させる事が出来るようになった。色による違いは大きい。たとえ同じ色味を捉えられているとしても、自分の好みによって感じられ方は大きく変わってしまう。それぞれ異なる人物の眼と異なる脳を通しての時点で、感覚の不一致は避けては通れないのだ。そんな中で、写真という存在はまさに革命的と言えよう。ここで映し出される世界は誰の眼も、脳も通す事なく生まれたもの。その世界の色味は、趣味・嗜好を一切排除して見られたものの。私達は写真を通して自分の中との感覚の不一致を覚え、同時に他者の感じる世界を感覚的に感じ取る事が出来るのだろう。

私が生まれたとき…

両親は私の顔を見てから最終的な名前を決めたと言う

福永みくら

1994年生まれ、学生

人とは違った個性的な名前がよかったらしい。家族は熱心なクリスチャンで、4人の子供の名前は全て賛美歌にちなんで付けられた。一見変わった名前だが、キラキラネームやDQNネームなんて世間で話題にされる中で、私は自分や姉弟の名前がそういうものだと感じたことがない。むしろみんなそれぞれの名前を気に入っているし、その名前であることに誇りを持っている。私の名前は「神様のおられるところ」という意味で、いつも清くそこに近くあれるように、という願いが込められている。

人の名前は生まれてからずっと呼ばれ続けるものであって、単に個人の特定以上のものだと思う。ある名前を付けられたらそれらしい顔つきになるだろうし、性格や生き方に至るまで少しでも影響を受けないことはない。さらに、同じ名前でも人によって応え方は違ってくる。この名前を呼んでくれる自分以外の人の目には、私の名前と人間とがどのように映っているのだろう。

考え出したらキリがないものの、いずれにせよ私はこれから先もこの名前と共に送る人生が楽しみでしかたない。

私が生まれたとき、ヤマで狐が鳴きました。

「ヤマ」は「炭坑」と書きます。私が生まれた九州北部の小さな「炭坑」は海辺にありましたが、でも呼び方はやっぱり「ヤマ」です。ヤマには子どもたちがたくさんいました。そして狐たちもたくさんいました。小規模のヤマがたくさんあった九州北部には、狐にまつわる話とともに、狐たちが本当にたくさんいたのです。ただし、狐を実際に見た者はほとんどいなかったのですが。それでも、狐は怖い存在で、実際にいろいろな悪さをしました。火傷をすると、火傷の皮膚は狐が大好物で食べに来るなどという話は、子どもたちを震え上がらせましたし、近所のお兄さんやお姉さんから教わるのは、狐に化かされないおまじないや、災難を呼び込まないための忌み事です。

やがて、日本の近代化を支えた石炭に代わって石油の時代になると、ヤマはあっという間に消えて行きました。町の小学校に入学した時、子どもたちは2000人を数えましたが、卒業するときには700人となり、原子力発電の現在は70人ほです。

ヤマのシンボルであったボタ山には木が生い茂り、かつて子どもたちが走り回り、ハーモニカ長屋が連なった炭住(炭坑労働者用住宅)は、その跡さえありません。そして狐もいなくなりました。閉山によってヤマの家族は京阪地区の工場へと移り住みましたが、そんなところではもう狐の住処はありません。でも、今でもヤマの跡を歩くと、誰かに見つめられているような気がします。



私が生まれたとき、一番はじめに祖母が来た。

そこは神奈川の小さな病院で、
叔父と叔母といとこが来て、父はまだ台湾にいた。

私が1歳になったとき、東京に引っ越しをした。
祖母と暮らすのだ。
家の前には同年の子が住んでいて、一緒に遊んだ。
祖母の部屋の窓から「今日、遊べる？」と毎日訊いた。
私たちが6歳になると、
幼なじみは坂の向こうへ引っ越しをした。

私が10歳のとき、祖母の部屋にベッドが来た。
並んで眠るとき、
となりに見えるのはタンスとベッドの骨組みになった。
それまでは隣にあるのは祖母の顔。
いびきがうるさかったので、
祖母の足を蹴ってしまったら
びたりと静かになったことがあった。
しばらくするとまたいびきが聞こえて来て、
私はとても安心した。

私が14歳のとき、祖母は家からいなくなった。
同じ市の川沿いの老人ホームで暮らしている。
それから私の家族は1人減った。祖母は家に帰って来ない。
もう弟のおいがする部屋を、
私はまだ祖母の部屋と呼んでいる。

近所の人は祖母の友達。
天ぶらやドーナツを作ってくれて、庭の柿をたくさんくれた。
その人の家は空き家になって、空き地になった。
柿の木があった場所には、2日前に電柱が立った。
あの電柱を柿の木だったと思うなんて
私くらいなものなのだろう。
そのうちきっと綺麗な家が建って、
知らない人が住むのだろう。

いつの間にか時間が経って、もうすぐ私は二十歳になる。
たくさんのことを忘れて、私は今を過ごしている。



When I was born,

I was just a small stump with four smaller stumps attached to it.

I guess they were called "arms and legs"... my parents were both from Macau and god knows how they met, they got married and happily settled in Hong Kong. Some short years after their marriage, they gave birth to me - their first stump. In two years after their first, they gave birth to the second and then the third.

The earliest memories I have for my childhood was as little as three or four years old. I remember my grandma (my mum's mum) used to take care of my younger sister and me in Macau, while my parents were working in Hong Kong. My grandma was a wonderful wonderful lady and she kept lots of animals in her house. Dogs, cats and budgies just to name a few! She used to walk us to and from school every day. It was like holidays, every day, all through my kindergarten life with her! As I was old enough to attend primary school, I had to return to Hong Kong for primary tuition so it was sad to leave my grandma and everything in Macau - it was the first time to feel "cruelty" in such a young life...

My childhood was full of wonders because I was living in my own fantasy world fantasizing vampires, zombies, UFOs, the noch ness monsters and the list went on... I guess that made me one of those odd ones in the class who didn't relate to the rest. But because of that, I was the gifted one who excelled in art lessons. Most of the work I created in primary school, classmates copied. That's quite alright I thought, because I knew I was always ahead of them! I still remember my very first project that was quite "pioneering" at the time was adding light bulbs to the front of the paper vehicle I made, to create an explosion - a scene from a traffic collusion. Back in early 80's when we were no more than ten years old, no one in the class would have thought of adding lights to paper sculpture. So when my artwork lit up in the class, so did the eyes of all my classmates!

My real "breakthrough" came when my mum took me to see STAR WARS in the mid-eighties. The characters, the visuals and the sound struck me like lightning! Why was it a breakthrough for me in such young life? Because it was the first event that had actually got me started thinking of my own future, to pursue a career in the world of movie-making!

Well, it didn't matter whether if I had achieved a career in move-making or not... the rest of my life was history after the last paragraph I wrote but I will NEVER forget my happy childhood who was shared among my grandma, my parents and a few special ones in my heart!

By the way, let me introduce everyone (clockwise) starting from me - I was the one crouching down in the middle of the photo, my youngest uncle, my youngest brother, my grandma, my parents, my elder uncle, my grandpa sitting down and my sister. This photo was taken in Macau in Chinese New Year and I guess I was six years old (?)

Alex Garcia

1971年生まれ、香港在住





私が生まれたとき…
私は生まれるか分からなかった。

泉里歩
1995年生まれ、学生

私はよくこの世から消えてなくなりたいと思う。死ぬのではなく、消えてしまいたいのだ。消えるのは物体として消えるだけでなく、人の心から私の存在も消えてなくなりたいのだ。そうすれば誰も悲しまずに済む。私は家族が好きだから家族の悲しみ顔は見たくない。だがこの世から消えてしまいたい。

ふと、母になぜ私は生まれたのか聞いたことがある。「元々子どもはつくる予定は無かった」と言われた。その言葉を聞いて私は少し心が軽くなった。待望の、待ちに待った子どもであつたら親の期待も増えるだろうが、予定外の子どもなら好き勝手生きれるような気がしたからだ。その通り私は自由に生きれている。

私は生まれたからこのような感情をもてるのだろう。もし生まれてなかったらこんなことも考えることは無かつたし、考えることは無かつたと考えることも無かつた。消えてなくなりたい。だけど家族は大好きだ。

私が生まれたとき…
体は地球にあったが、中身は宇宙人だった。

1995年1月31日
母の出産は、30代の初め。
3500g、重さも普通だろう。
普通ではないところといっても
帝王切開なところだけだろうか。
帝王切開なゆえに、予定日にさっくり、
はい誕生。はい終わり。
ところが、私が小学生になって母から聞いたのは、
あんたは宇宙人。
この一言だった。
ふざけて言っているのは子供ながらに
きちんと分かってはいたが、
宇宙人と呼ばれた。
なぜそう呼ばれたのか？
人に呼ばれても無視してマイワールドに入っていたし、
夜中、母の布団の周りをひたすら走り続けていたり、
何も無いところに視線をやったり。独り言も多い。
宇宙人ばいところは？と言われてみると、
悲しいことに思い浮かぶことが沢山ある。
私は普通の人間ではないのか。
でも宇宙人だなんて急に言われても信じられないし、
嘘だろうと思う。
でも
父も
姉も
友達も
私のことを宇宙人と呼んだ。
宇宙人が実在しないとしたら、
私の中身は何なのか。

私が生まれるまえ…
腹の中で起きてた事件がある。
地震
阪神淡路大震災 1995年1月17日のことだ。
母はエコー検査の時、
テレビでその様子を見たと言った。
沢山の人が消えた。
魂は宇宙へ向かう。
ほんの少しの狂いで魂は地球へ。
魂は私の中に入ってきた。
私の自我が出始める頃に、私の中身は交信を始めた。
その魂の友達に連絡をするために。
あれ。おかしいな。
本来の私はどこにいるのだろうか。

鈴木奈緒
1995年生まれ、学生



私が生まれたとき、妹は死んでいた。

大久末葉実

1991年生まれ、学生

母が言うには、最初は一卵性の双子になるはずだったらしい。母親の子宮の中で最初ひとつの生命だったのが途中でふたつに別れ、そのままふたつになるかと思いきや、片方はもう片方に養分として吸収され、最終的にはひとつになった。そこから産まれるためにヒトの形を成していき、無事産まれたのが私なのだと、母は話していた。



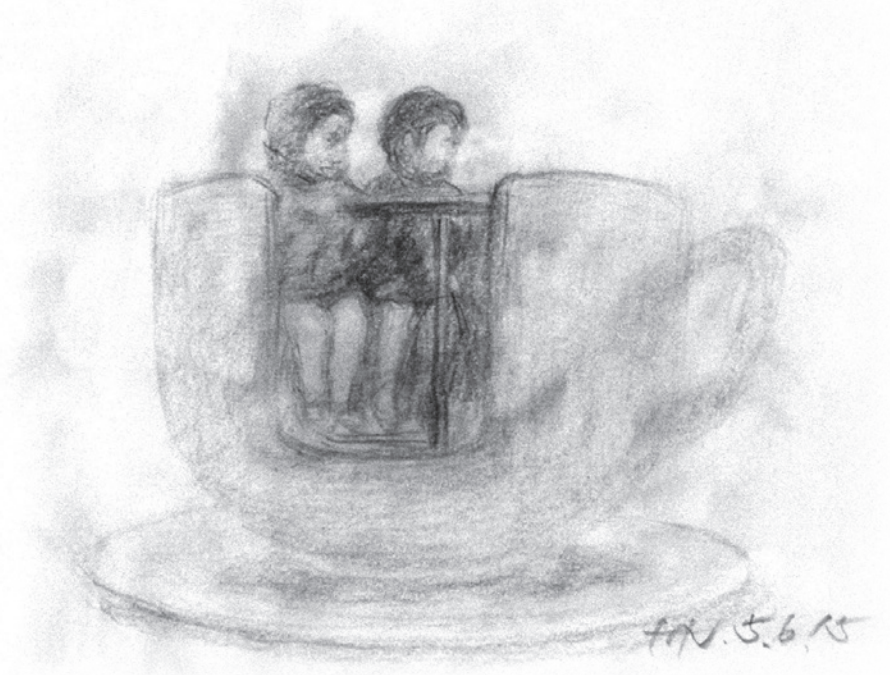
母の子宮の中で起こった命の不思議でしかないのかもしれない。

もしかしたら姉になったかもしれない。ひょっとしたら兄、または弟ができる可能性もあった。

不毛な考えを話すと、私が元気に産まれてきたからそれで十分なのだとみんなそう答える。

でも確かに、少しの間だけこの世界に小さく小さく在った。

だからたまに「おーい」って声を投げかけてみるけど、やっぱり誰もいないようだ。



わたしが生まれた時、
まだこの窓には沢山の子どもたちの顔が見えた、

母が言うには、彼女はもっと大きな水辺で生まれ、
この子どもたちに拾われたのだと言う
子どもたちはわたしの大きくなることを喜んでいた
子どもたちは少し乱暴だけれどとてもやさしかった
毎日たくさんのおしゃべり、
窓越しにうわさ話をするおませな女の子、転がって喧嘩する男の子、
わたしはとても好きだった
わたしの母が死んだ日は、くしゃくしゃに泣いていた
わたしは一人になったけれど、
毎日窓から見える子ども達がいたからさみしくなかった
わたしはいつも願っていた、ぴんと張る枝のような足があれば、
彼らといっしょに走れるのに

とつぜん、窓の向こうの景色がガラガラと崩れたのだった
体に草やら砂が当たってとても苦しかった
彼らは泣きながらおかあさんと呼んでいた
先生が彼らをどこかに連れて行ったあと、



1990/2/6/15



それからもう誰もやってこない
あれから幾年経ったのか？
時折、来ていた白服の人たちももう見えない
教室の中は草でぼうぼう
わたしはもう膨張しきって、大きくなりすぎたひれを、
窓の外に出してみた

今なら走れるかもしれない
子どもたちに、会えるかもしれない

そうして、初めて地面に降り立ったのだ。

末至磨明弘

1960年生まれ

私が生まれた時…。

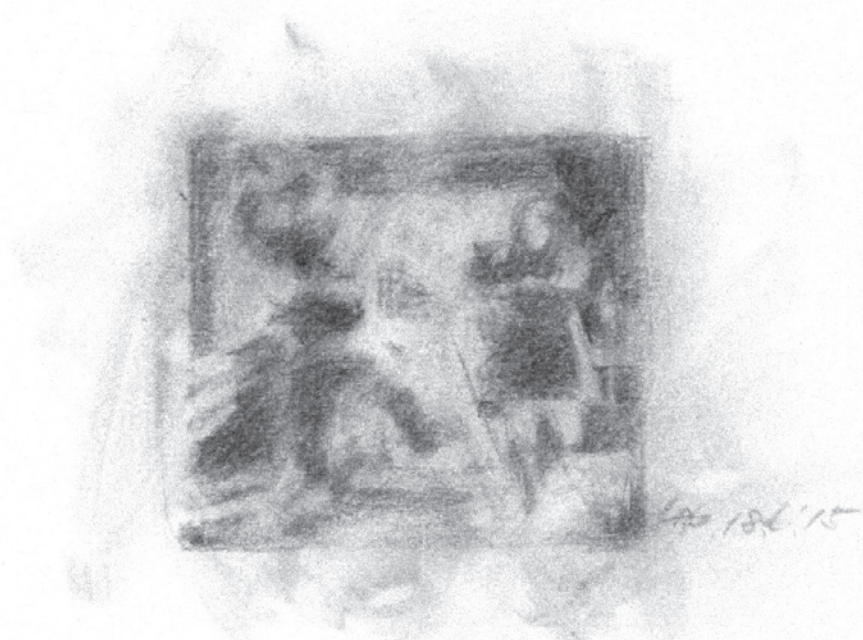
この話はこれまでに何回聞かされたことだろう。

今、ワタシは昭和生まれの不良中年をしている。ワタシはいわゆる悪ガキだった、と思う。子どもの頃、悪さをして、特に小学校3年の時、通学路にあった廃屋（元は何かの作業所だったらしい）のガラスをことごとく割った時。先生に呼び出され、こっぴどく叱られた時のこと。親に聞かされた説教の言葉の出だしが、「あんたが生まれた時…」半ば、うつろな状態で聞いていたことを思いだす。たしか、1600グラムの未熟児だったこと。昭和30年代のその当時、生きるか死ぬかの赤ん坊だったと。だから、出生届は14日目にしたそうだ。今思うと（自分が親になった時、確かに娘の誕生の様子をはっきりと思っているから。） そうなんだ、と納得できるが。

ちっちゃい頃から絵を描くのは好きだった。ものの弾みでお絵かき教室に入ったが、1番好きなお題が「好きな絵」。毎回、お墓の絵を描いた。地獄の花。紫っぽい色を使っていたような気がする。親は心配した。「この子は変なんじゃないか？」

社宅4Fに住んでいた当時、1番覚えているのが、花吹雪事件である。つまり、新聞紙やら広告やらを、思いっきり細かく切って、4階の窓からばらまいた。下にいたお母さんたちやお友達が、「なんだ、なんだ。どうした？これは…。」といいながら上を見上げて騒いでいた時。モチロン、あとでお説教。これ以外にも似たようなジケンが多々あった。

大人になって、父と酒を酌み交わすようになり、酔っ払って、いい気分で「おまえが生まれた時」と話す父は幸せそうだ。



私が生まれた時。

それは、暮れも押し詰まる12月29日。

おおたきみよ

1967年生まれ

二重苦と言われる29日に誕生した時から私の一苦が始まった。

「可愛い赤ちゃんねえ～」と誰もが言う言葉だが、私はかなり不細工で誰一人として可愛いと言う人はいなかったそう。

母から私が、真っ黒、毛むくじゃら、哺乳類の進化の過程を逆走した顔だったと聞かされた。ここまで言われたら真相を確かめたいが、その時の写真は一枚もないのだ。色白で可愛い兄の写真なら何枚もあったのに…この差は何なんだ！？

続いての二苦は、私の名前が決まらなかったことだ。普通の親なら『賢く綺麗で良縁に恵まれ、その上、親孝行になるであろう画数は？』と躍起になるはずだ。見兼ねた婦長さんから「私が一ヶ月前に名付けた名前はどうかしら？」との提案で何とか決まった。

名前に関しては続きがある。

中学入学時、同じ名前の子がいた。誕生日は、私より一ヶ月早い！その時、私はビンと来た。彼女が名前の本家本元であり私は「名前泥棒」なのだ。

こんな人生を歩んできたが、グレもせず何とか幸せに暮らしている。どんなに不細工な顔で生まれてきても喜んでくれた祖父母や兄弟がいたからだろう。でも、私が生まれた時の写真を見たいと言う衝動に今でもかられる。怖いもの見たさか？



西比呂子

1994年生まれ、学生

わたしが生まれたとき、2月の大雪の日だった。

あの頃の東京は今みたいに冬に雪が降ることは珍しいことじゃなくて、積もった雪で雪だるまやかまくらだって子供がはしゃいで作っていた。

5歳離れた私の兄も例外ではなく私が生まれたときも祖父と自宅付近の駐車場にかまくらを作っていたと聞いた。

「あの頃は雪が汚いものだななんて知らないでよく食べていた。」

そんな風に言っていた。

兄に「わたしが生まれたときどんな気持ちだった？」と聞いてみたけれど、兄は「作ったかまくらのことしか覚えてない。」と言っていたが、母は「そんなこと言って随分はしゃいでいたじゃない、いろんな名前考えて。」そう言われて兄は恥ずかしいのか首を傾げていた。

母は「お兄ちゃん産んだときはもう大変だったのよ。なっかなかでてこなくて！あんたのときはびっくりするほどすんなり。でも体は大きかったわね、38000gくらい？今でもからだおおきいけどね、あんたの太ももは生まれながらの太さなんだよ。」と言っていた。

祖母の姉は「わたしもお兄ちゃんの子守に行っていてね、かまくら作りながら待っていたの。予定日より早かったから心配したのよ。」という話から始まり、

「ひーちゃんは小さいときから鳥が好きでねえ、わたしにおんぶされてるときもいつも空ばかり見ていたのよ。『おばあちゃん、カラスはどこへ帰るの？』って聞くのよ、『カラスはお家に帰るのよ、ひーちゃんもおうちに帰ろうねえ』なんて言ってねえ」話していた、このはなしを聞くのは何十回目だろうか。

生まれてもう21年経ってしまった、しかしまだたった21年だ。
祖母も祖父も親戚の叔父も亡くなり、祖母の姉ももう直ぐ85歳を迎える。
同じ時間を共有した、わたしの昔を知っている人はわたしを置いていく。
わたしもこうして少しずつ少しずつ死んでいくのだろう。





私が生まれたとき、家族で、神奈川県綾瀬市の白いマンションに住んでいた。

飯島まり子

1994年生まれ、学生

マンションは地形的に谷になっているところであって、両脇が坂道だった。坂道を上がって少し歩くと、小さな商店街があった。私は母の買い物に着いて行くと、よく本屋さんで絵本を買ってもらった。店の前にある、カラフルなピンポン玉みたいなガムが出てくるガチャポンもやらせてもらった。反対側の坂を登っていくと、大きな木がたくさんある公園があった。公園のブランコをこいで、思いっきり仰け反って空を見上げると、葉で暗く影を作っている大きな木々達の間から、青い空がとても明るく見えた。マンションは飛行場が近かったから、ベランダから、遠くの空で飛んで行った



り帰ってきたりしている飛行機をよく見た。弟が生まれていなかったこのこと、お母さんと黄色いメントスを食べながら一緒に夕焼けの中に飛んでいく飛行機を見たのを覚えている。隣に住んでた五歳上の友達の部屋には、セーラームーンの鉛筆と、キューティーハニーのリップクリームがあった。最後のバイバイのときに、まん丸でフワフワのキティちゃんのぬいぐるみを彼女は私にくれた。幼稚園に入る直前に東京に引っ越してきて以来、あの町のことはもう分からない。しかし、色とりどりの優しい記憶はいつまでも私のなかに残っている。



私が生まれた時、
その瞬間に祖父のこぼした言葉が今でも家族の中で話題になる。

松田有人
1995年生まれ、学生

「有人は我が親友、心の友だ。」という言葉である。祖父がこの言葉を残した事を私は母から聞いた。

私の祖父は世論一般でいうところの“たまに会いに行く優しいおじいちゃん”ではない。私の祖父は、実家の隣の家に住んでいる数学者である。学問に携わる人間というのは“変わり者”らしい。1日のほとんどを書斎で過ごし、家族であっても決して書斎を開ける事は許されない。そんな祖父に惹かれ、私は何枚の絵を描いてきた。祖父の目はひどく“深い”。祖



父の人生、思考をそのまま投影しているかのようだ。だが、その深みの中を突き抜けてくる光がある。祖父の目に巨大な意志を感じるのだ。祖父はよく、自分自身を人付き合いの苦手な孤独な奴だと言う。その言葉を聞く度に、切なくなり、祖父を孤独にしたくないと感じている。祖父は、私がやっている美術に理解がある。私だけの為ではなく、祖父の友としても、美術に対してより真摯に向き合っていく。



平澤夏葉

1995年生まれ、学生

私が生まれたとき、兄は4つで、

私と兄の間には常にどんなときでも「4つ」という距離が存在する。

「手がかまれる」そう言って馬のえさやりを中々しようとしなのが兄で、そんな兄の隣で自慢げに馬の口の前に 手を出してえさをやっていたのが私である。彼は少々おくびょうで、私との体格差もさほどなかったからか、まるで私が先に生まれてきた子のようにだった。このときの4つという私と彼との距離は10センチにも満たなかったものだと思う。

しかし、今は彼も一人暮らしをする勤め人になってしまった。つい最近まで、同じ大学生で、共に夏休みをゴロゴロと畳の上で過ごしていたというのに、随分と遠くに行ってしまったなあと、たまに思う。私と彼の間がまだ4つだとしても、立場は随分と変わってしまって、今このときでさえ彼が無事に暮らせているのか私には分からないようになってしまった。

このように、彼の存在をすごく近くに、あるいは遠くに感じる事が私にはよくあるが、どんなときでも4つという距離は変わらず私たちの間に存在する。それは私が生まれたときから変わることのできない項目の一つであるのに違いなく、それ以上、またはそれ以下の存在に私になることは決してない。これはこの先、彼が死んでからだって、私たちの間は「4つ」という距離があり続けるのであって、私が生まれたときからずっとそれは決まっていたことであった。



私が生まれたとき、ミスチルは、

川内大

1995年生まれ、学生

“果てしない闇の向こうに手を伸ばそう 誰かのために生きてみても tomorrow never knows”と歌っていた。希望を信じて積み上げたものなんて、簡単に、日常茶飯事にひっくり返った。変な時代になったものだ。期待をどこに置いたらいいのかわからない。生きるのなら、暗闇の中をただ進むしかない若者にも大人にも余裕なんて無かった。宇宙人がいないことを誰もが知っていて、知った上で皆が夢に見てたくらいだ。パプルの空気を吸っていない、私はディスコも知らない、好ケイキというものを知らない。

夢というイメージをつかめない子供に夢を見ろという、夢を追いかけるなんて非常識という大人、を見てきた子供。

でもいつか、私はおとぎ話以外の夢を見てみたい。



私の生まれたとき……
ぼくはこうちゃん。

匿名

2013年生まれ

2013年5月17日生まれ。5月のよく晴れた暖かい日に、ママが一生懸命産んでくれた。ママは看護師で、いつもみんなを助けている。

だから、何度も赤ちゃんを取り上げたり、産まれる瞬間に立ち会ったけれど、ぼく産まれたたとき、たくさんの赤ちゃんを見てきていたけれど、その中でもイチバン可愛く思っただって！

ぼくは、いつも無邪気で誰にでもニコニコしているよ。 いっぱいいっぱい笑うから、ぼくの でも、ぼくがイチバン好きなのはおじさんっ！ おねえさんも好きだけど、安心していられるのはおじさんのとなりだよ。

大好きなのは、トマトとかっぱえびさんと……たくさん！
食いしん坊で、まだ三ヶ月くらいなのにぼくぼくバナナを食べていたらしいんだけど…よく食べるからみんな驚いちゃったみたい。

2011年のあの震災から、少しずつみんなが元気になって、ママもパパもおばあちゃんもおじいちゃんもみんないて、そして今日のぼくがいる。

世界が少しずつ変わって、大きな黒い影が力を伸ばしてる。 ぼくはまだ小さな子供かもしれない。でも、ぼくの笑顔で変わることもある。これからなにが起こるかわからないけど、ぼくはこれからも笑顔をたやさずに歩いていくよ！

私が生まれた時、夕方でした。

父、母のもとに、長女として生まれました。

体重は重いほうでした。

生まれたときのことは、よく覚えていません。

赤ちゃんのときの記憶は、どこへいってしまうのでしょうか。

生まれたときに何を感じていたのか、

自分のことでも、全く覚えていないことが、不思議です。

時がたって、忘れてしまうことの方が

多い気がしています。

楽しかったこと、苦しかったことの思い出は、

自分の中で夢や感情と混ざり合って、

いつの間にか本当とは

かけ離れてしまうときがあります。

私はそれがとても不安です。

なぜ忘れてしまうのでしょうか。

忘れると同時に、

たくさんのことを得ているのかもしれない。

自分の中に入りきらないのだと思います。

それでも、記憶をたどって幼い頃の感情に

一瞬でもたどり着けたとき、

自分の中に安心感が生まれます。

私であることを実感するという感覚です。

ときどき思い出すことで、

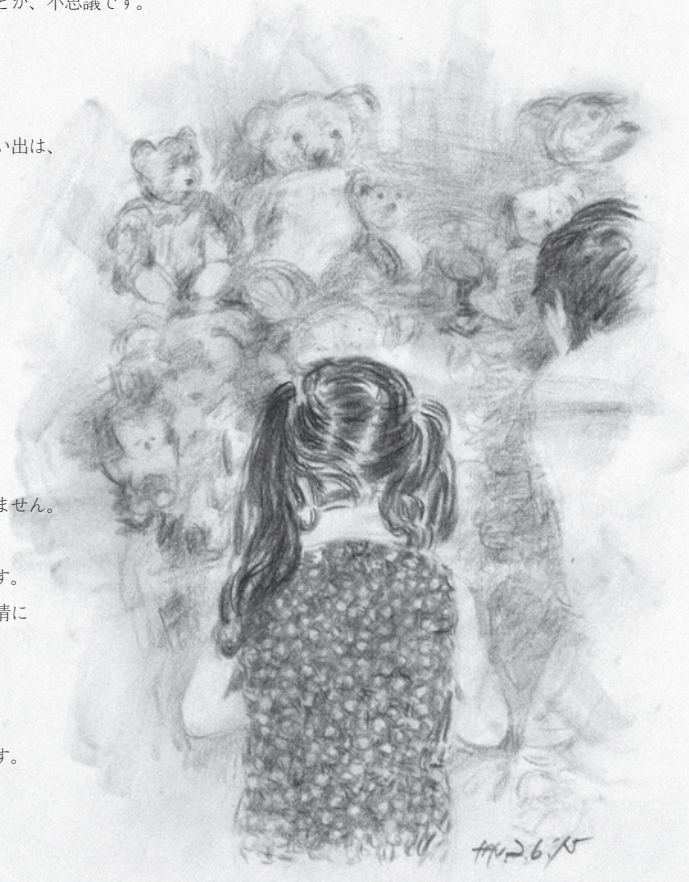
自分で自分を確認できる気がします。

生まれたときの気持ちは覚えていないけれど、

そこには、何かにまよったり、不安になったりしたとき、

誰もが記憶をたどって

帰ることのできる場所があるのだと思います。



小侯璃子

1995年生まれ、学生

私が生まれた頃、紫峰山の麓には、

はっきりと山とわかる形の小さな“ぼこやま”があったそうです。

紫峰山というのは広い関東平野にくっきりと円すい状に浮かび、なだらかな両肩は十二単を連想させるようなとても美しい山なのです。それに比べて、ちょこんと丸っこい小さな山は何とも可愛らしく、高貴な姿ながらも母性を感じさせる紫峰山とは対称に、地元の人たちは親しみをこめて“ぼこやま”（おぼこの意）と呼んでいたようです。（本当は清田山）

紫峰山から連なる短い山脈は日本有数の御影石の産地で、20年くらい前までは山からの採石が盛んに行われていました。

ぼこやまもその山の一つで、だんだんと山肌を削り取られる姿は遠目ながらも見てとられ、痛々しさを感じました。最初は筋目に、そしていつの間にか地滑りの後のように、一つの斜面がザックリと…。

石材産業に関わりない人々の世間話からは、「ぼこやまもあんなになっちゃって可愛そう。」などとの声も聞かれましたが、特に反対する人はいなかったようです。

私が大人になる頃には、ぼこやまはもう小高い丘にすぎず、平らに整備された丘の上には、町の温泉施設が作られていました。

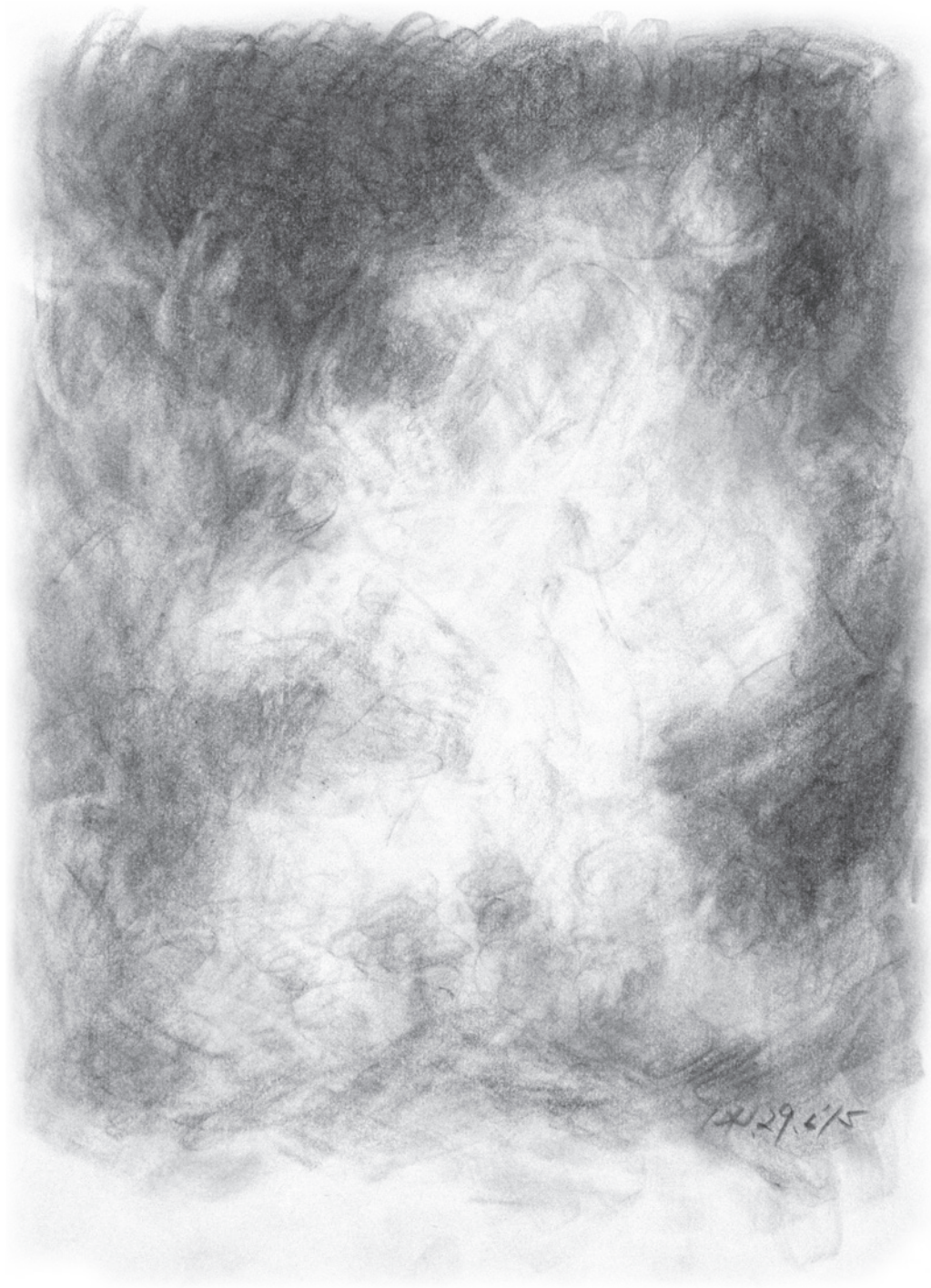
私はちょうど自分の成長期に見てきた山の変容に、人間の自然に対しての自分勝手さの恐怖が頭から離れずにいます。このままではいつかきっと、地球が人類を許さない日が来ってしまうのではないかと。

古の時代、人は山や原野を開拓する際には地の神に聞いたそうです。「ここを切り開いてもいいか?」「ここで火をたいてもいいか?」「家を建ててもいいか?」「少し木をもらってもいいか?」と。それに山や野原が答えたそうです。「いいぞお。」と。（宮澤賢治『狼森と筑森、盗人森』より）

はたして、紫峰山はぼこやまを削ってもいいと答えていたのでしょうか。



「早池峰神社神像」



井上美湖

1994年生まれ、学生

私が生まれたとき、外は炎天下だった。

真夏を過ぎたとは言え太陽はまだまだ燃え盛り、ジリジリと照らしていた。

空気は熱く重たく、身体中に纏まりつくようだった。しかしそんなことを知らない私は、早く出せと言わんばかりに母の腹を蹴った。こんなところじゃなくて、どこか、どこか果てのないどこかへ、まだ何も知らないどこかへ、とその衝動の赴くままに母の腹なかを暴れまわった。

そしてとうとう、暗くて温かい、心地のよい母の腹から出た。私は、なんだここは、熱い眩しいと言葉にならない言葉を産声として叫んだ。血が、酸素が、光が身体中を駆け巡り、ずあぁっと燃え広がる様は、まるで火の子のようだった。しばらく経ち炎が一通り燃えつき、母の腕に抱かれた私は揺らめく世界をようやく見た。ここが私のいきる世界かと、心のなかに鮮やかな炎を燃やしながら、私は初めて世界を見たのだった。

炎は年月を重ねるごとに様々に変化した。大きくなったり小さくなったり、鮮やかになったり燻ったりした。私やその周りや生活、世界が刻々と変わっていくなか、炎は幼かった頃と比べてあまり激しく燃えなくなった。しかし、今も世界を見つめながら、炎は静かに燃え揺らいでいる。そして、また新しい炎が生まれる瞬間を心待ちにしているのだ。

私が生まれたとき、それは40億年も昔のことですが、

あたりにはまだ生命^{いのち}というものがありませんでした。

生命^{いのち}のないものは無数に存在しましたが、それらは崩壊に向かって進むだけでした。

私はまわりからからエネルギーをつくることができるようになりました。

そしてなんと…自分の複製をつくれるようになったのです。

でもほんとうにそうだとしたら、私の前に私と同じような生命^{いのち}があったのでしょうか？

生命^{いのち}の意味のひとつが自己複製だとすると当然私の前にすでに私と同じような

存在があったということになります。でもその始まりの始まりはどうなのでしょう。

無数のもの^{もの}の存在、その無数の実験の中からまるで奇跡のように私のような

生命体^{いのち}が生まれたと考えるしかありません。そしてまたさまざまな環境のなかで

多様な実験が繰り返され、なんとか生命^{いのち}が生き延びられるようになったのでしょう。

生命^{いのち}にそなわっている雌雄、かたち、色などはそれが生き延びるための

多様な実験の結果にほかなりません。私はここで生きられるかどうか、

多様な実験をしながら次の生命^{いのち}にその情報を引き継いでもらい、死んでいきます。

私が生まれたとき……

私は1996年10月3日、暖かな昼下がりにもうすぐ生まれました。

瀬田くるみ

1996年生まれ、学生

看護師さんたちが、もうすぐに生まれてしまうと急いで先生を呼び、慌ただしく産声をあげていたそうです。

母は、看護師さんたちの「なんて目の大きい子でしょう！」とまだ目も空かない赤ん坊を見つめて、愛らしいと褒める声を今でも覚えています。

病院では、大人しく大きな声で泣くことも少なく1週間程で退院しました。家でも夜泣きも少なく、順調に育ちました。

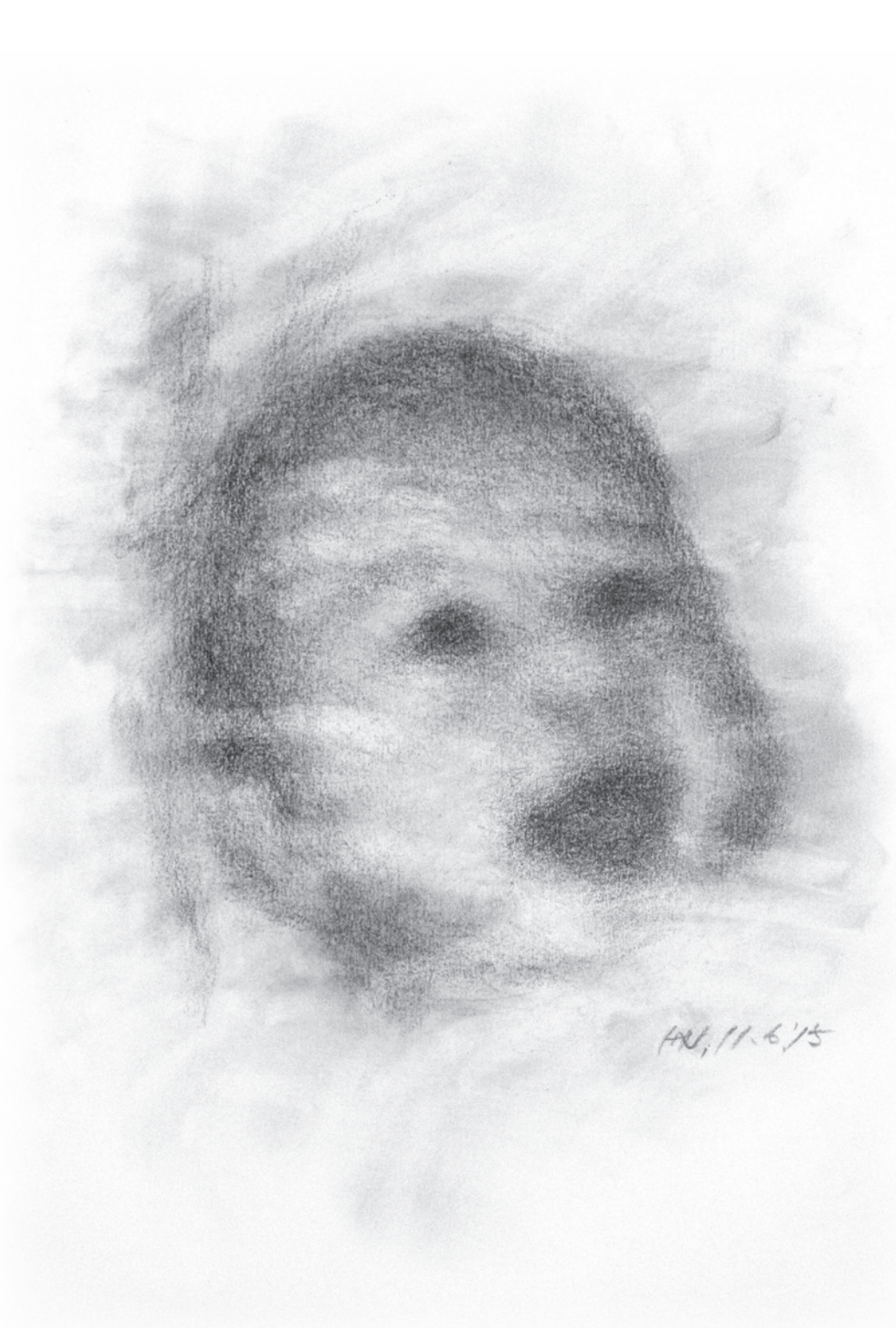
1ヶ月検診のときに、くるみという名前はその日に四人目とたくさんいたそうです。通りすがる人に、良く声をかけられたそうですが、(可愛いですねなど) あまりニコニコしなかったそうです。

地下鉄サリン事件や、阪神淡路大震災から1年、少しずつ世の中が悲しみを乗り越えて明るくなっていきました。

しかし、祖父母の住む地域での少女の殺人などはショッキングな事件であったそうです。

それから、まだ幼稚園にも上がらないくらいの中には、大きな病気にかかり、人工透析を受けないといけないと医師に告げられました。C型肝炎などの病気のリスクがありつつも、サインをせざるを得なかったそうです。しかし、その後病状は回復し、人工透析も受けずに済んだことは幸運だったと思います。

今も、大きな病気をしたのにもかかわらず元気に過ごしていただけるのは、たくさんの人の支えがあったからだと聞いてとても深く感じました。



対 話

「私が生まれた時…」

発行日

2015 年 8 月 8 日

監修・ドローイング

長沢秀之

装丁・デザイン

大橋麻耶

写真・文章提供者

泉里歩

小俣璃子

小場いつか

平澤夏葉

おおたきみよ

Alex Garcia

大久末菜実

飯島まり子

飯島かおり

川内大

瀬田くるみ

鈴木奈緒

西比呂子

井上美湖

松田宥人

福永みくら

天草ミオ

未至磨明弘

長尾重武

大坪圭輔

奥山あたる

猪野進

長沢秀之

他、匿名二名

ドローイングは参加者からの

提供をもとに起こしていったが必ずしもその限りではない。

例えば長尾氏の提供した写真は幼児のものだが、

文に合わせて戦争当時の写真をもとにドローイングを追加、

大坪氏の場合はヤマの写真を使用し、

もう一枚の子どもたちの写真は他の文に添えた。